

研究推進校におけるデジタルシティズンシップ教育の推進

服部, 隆

(出版者 / Publisher)

法政大学図書館司書課程

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

The Journal of Media and Information Literacy / メディア情報リテラシー研究

(巻 / Volume)

4

(号 / Number)

2

(開始ページ / Start Page)

72

(終了ページ / End Page)

76

(発行年 / Year)

2023-09

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00030067>

法政大学図書館司書課程
 メディア情報リテラシー研究 第4巻2号、072-076
 特集：デジタル・シティズンシップ教育最前線

研究推進校におけるデジタルシティズンシップ教育の推進

服部 隆
 八王子市立由井中学校

1. 研究動機

GIGA スクール構想の中、1人1台の学習用端末を利用する上で、安心安全に活用するための観点として、デジタルシティズンシップ教育の推進に力を入れている。

デジタルシティズンシップ教育と比較されるのが、「情報モラル教育」である。「情報モラル教育」は、心情規範で、情報社会において、適切な行動を行うための考え方や態度である。その一方で、「デジタルシティズンシップ教育」とは、デジタルの世界に起こりうる事象や出来事について、行動規範として学習していくものになる。これを実践するためには、小中高を含めた長期的なスパンでの取り組みが必要になる。

2. 研究実践①

研究実践の1つ目としては、「デジタルシティズンシップ教育」の導入として、「メディアバランス」についての授業を行った。以下の内容は、『デジタルシティズンシップ+』⁽¹⁾の内容を参考に実践したものである。生徒自身の中で、1日あたりのメディアに触れる時間を考え、その上で他者と比較して、バランスの取れた利用計画をつくる取組を実践した。

対象学年 中学校2年生

単元名 「メディアバランスについて考えよう」

単元の目標 普段の生活でどのようにメディアとのバランスをとっているか振り返る。

時間	生徒の活動	指導上の留意点
導入 10分	1 普段、どのようにメディアと付き合っているか振り返る。	○メディア（SNS、ゲーム、ウェブサイト、新聞、漫画）の概念を理解し、それぞれがおかれている状況を共有する。
展開① 10分	2-1 メディアバランスの意味を知る。	○メディアバランスとは、「健康的な生活と、さまざまなメディアの利用をバランスよく両立させる利用」であることを理解する。

<p>展開② 20分</p>	<p>2-2 健康とバランスがとれたメディアの利用のための計画をつくる。 A：バランスのとれた1日を考える。 B：グループごとに互いに考えたプランを共有し、意見交換する。</p>	<p>○「平日の朝」、「帰宅後から寝るまで」、「休みの日」の3つの場面に分けて、「何のメディアを」、「どのくらい使うのか」詳しく書いてもらう。 ○4人グループでプランを共有し、以下の視点で情報共有をする。 ①考えたプランを実行するとどんな気持ちか。 ②無理はないプランか。 ③心と体が健康的な生活を送ることができるか。</p>
<p>まとめ 10分</p>	<p>3 最終的なプランと、その理由の発表を聞き、今後の自分のメディアの関わり方について、自分なりの意見を持つ。</p>	<p>○最終的なプランと、その理由について2～3名ほどに発表させる。 ○本時の振り返りとして、「今後のメディアとの関わり方」について考え、自分なりの意見を文章にまとめるようにする。</p>

3. 研究実践②

研究実践の2つ目としては、「プライバシー」との関わり方について考えた。2つ目の実践の内容も、『デジタルシティズンシップ+』⁽²⁾の内容を参考にしたものである。特に日常生活の中で起こりうる実際の事例を紹介して、その中で、自分の使用の用途に合わせて、取捨選択が出来るようにする力を身に付けさせるワークを行った。

対象学年 中学校2年生

単元名 「自分のプライバシーをどのように守りますか」

単元の目標 ネット上で自分のプライバシーを守るにはどうしたらいいのか、プライバシーの概念について考え、広告主がユーザーの情報を収集するさまざまな方法を分析し、自分のプライバシーを守るための戦略を明らかにすることができるようにする。

時間	生徒の活動	指導上の留意点
<p>導入 5分</p>	<p>1 プライバシーと個人情報との違いを確認する。</p>	<p>○プライバシーとは、「自分や家族のこと、自分の生活のこと。自分だけの秘密のこと。また、そのようなことを他人から干渉されたり、侵害されたりしない権利のこと」。 ○個人情報とは、「自分のことを特定できる情報のこと」。</p>

<p>展開① 20分</p>	<p>2-1 企業による個人データの収集について知り、それに対して、自分ができる対応策を考える。</p> <p>A：<ケンタさんの話>を読んで、欲しかった靴が広告で表示されるようになった理由を考える。</p> <p>B：企業による個人のデータ収集に対し、自分ができる方法を考え、共有する。</p>	<p>○SNS やweb サイトで閲覧しただけでも、情報が企業や広告主と共有されることに気づかせる。</p> <p>○グループごとに、互いに考えたプランを共有し、意見交換する。また、友達の意見を参考にし、考えたプランを見つめ直すようにする。</p>
<p>展開② 20分</p>	<p>2-2 自身のオンラインでの情報の取り扱い方を振り返ったうえで、プライバシーを守るために必要な知識を得る。</p> <p>A：自身のオンラインでの情報の取り扱い方を振り返る。</p> <p>B：プライバシーを守るために必要な知識を得る。</p>	<p>○自身のオンラインでの情報の扱い方を振り返り、危機感の薄さに気づくようにする。</p> <p>例) アプリのインストール時、位置情報やアドレスを許可したことがある</p> <p>○利用規約やCookieなどの、プライバシーを守るために必要な語句とその意味を考える。</p>
<p>まとめ 5分</p>	<p>3 学習のまとめをする</p>	<p>○インターネットでの行動、「立ち止まる」、「考える」、「相談する」の3点を考える。</p>

4. 研究実践③

研究実践の3つ目としては、「ネットいじめ」について扱った。3つ目の実践の内容も、『デジタルシティズンシップ+』⁽³⁾の内容を参考にしたものである。3つ目の実践は、①②の実践とは異なり、小学生を対象にした授業である。近隣の小学校で、SNSによるトラブルが高学年で発生しているという情報をもとに、小学校の教員と協議をした上で、この題材を扱うことになった。また、3つ目の実践については、「小中一貫教育」の1つとしても実践しており、中学校の教員が「出前授業」という形で、小学校において授業を実践している。そのような点から、児童も非日常感を感じて、自分ごととして捉えながら取り組んでいた。その後も、小学校の学級担任が「学級通信」の中で、本実践を取り上げ、学校全体そして、各家庭においても周知される内容となった。

対象学年 小学校6年生

単元名 「ネットいじめと行動する人」

単元の目標 ネットいじめに対処する方法や、いじめられている人のために積極的に行動す

る方法を確認する。

時間	生徒の活動	指導上の留意点
導入 5分	1 「ネットいじめ」とは何かを考える。	○ネットいじめとはどのようなものか話し合い、ワークシートにまとめる。 ○ネットいじめとは、「デジタル機器やサイト、アプリを使って、相手をおどしたり傷つけたり悲しませたり、困らせたりすること」と確認する。
展開① 16分	2-1 物語を読み、ネットいじめに対し、どのような行動をとることができるのか考える。 (物語のあらすじ) クラスの児童(タマミさん)が、先生から体育の授業で行うバスケットボールのチームを決めるのに知恵を貸してほしいと言われる。その後、チームが気に入らなかった数名の児童が、SNS上で悪口を書き込む。その結果、悪口を書かれた児童は、学校をしばらく休みたいと伝える。 A:自分がタマミさんなら、どのような気持ちになると思うか考え、全体で共有する。 B:いじめを止めるために、どのような行動がとれるかをグループで話し合う。	○タマミさんの気持ちに「共感」することが、問題解決の力になるということを伝える。 ○話し合いの前に、いじめには「傍観者」と「行動者」がいることを確認する。 ○「傍観者」から「行動者」になることで、状況を変えることができることを伝える。
まとめ 8分	3 困ったときの3つの行動ステップを確認する 「立ち止まる」、「考える」、「相談する」	○トラブルに巻き込まれていると思ったら、その場を離れ、一休みする。 ○気持ちを落ち着かせて、何をしたらよいか考える。 ○どうしたらよいかわからないときは、「信頼できる大人に相談すること」を確かめる。

5. 研究成果と課題

今回、初めて「デジタルシティズンシップ教育」を採用して、1年間の研究を進めてきた。成果としては、小中連携の軸となる取り組みになったということである。本校では、6月の小中一貫教育の日において、中学校の生徒を対象に、小学校の先生方を中心に授業参観をしていただいた。10月の小中一貫教育の日においては、中学校の教員が出前授業という形で、小学生を対象に授業を行った。下の図にあるように、このデジタルシティズンシップ教育においては、子どもたちのそれぞれの発達段階に応じた指導が必要となってくる。そのため、小学校段階から続けて取り組むことで意味を成す教育である。「デジタルシティズンシップ教育元年」に位置づけた今年であったが、次年度以降も中学校を拠点として、各小学校に裾野を広げていきたい。

課題としては、普段の授業の中での取り入れ方や、取り扱い方である。今回の授業は、学級活

動や総合的な学習の時間の中で取り組んだ。しかし、それだけでは数は十分でない。社会科や技術科、または道徳の授業の中でも単元や内容項目に合わせて取り組むことが必要である。大切なことは、「長期的」かつ「継続的」に取り組むことである。小中学校段階での連携は必須であるが、その先の高校や大学、社会人となる段階でも必要となる力である。「Society5.0」の世界において、人とデジタルが共存していくことが大切である。そのためにも、学校現場における「デジタルシティズンシップ教育」のもつ意味は大きなものである。

参考文献

坂本旬・豊福晋平・今度珠美・林一真・平井聡一郎・芳賀高洋・阿部和広・我妻潤子（2022年）『デジタルシティズンシップ+』、大月書店。

-
- (1) 坂本旬・豊福晋平・今度珠美・林一真・平井聡一郎・芳賀高洋・阿部和広・我妻潤子（2022年）『デジタルシティズンシップ+』、大月書店 90-97頁
 - (2) 同上、98-104頁
 - (3) 同上、76-83頁